教　育　課　程（第一部介護福祉士専攻科）

			開設単位	第１学年	合　計	備　考
科　目			必修	単位(時間数)	単位(時間数)	
人間と社会	社会の理解	社会の理解（講義）	2	2 （30）	2 （30）	
小　計			2	2 （30）	2 （30）	
介　護		介護の基本Ａ（講義）	4	4 （60）	12（180）	
		介護の基本Ｂ（講義）	4	4 （60）		
		介護の基本Ｃ（講義）	4	4 （60）		
		コミュニケーション技術Ａ（演習）	1	1 （30）	2 （60）	
		コミュニケーション技術Ｂ（演習）	1	1 （30）		
		生活支援技術Ａ（演習）	1	1 （30）	10（300）	
		生活支援技術Ｂ（演習）	4	4 （120）		
		生活支援技術Ｃ（演習）	2	2 （60）		
		生活支援技術Ｄ（演習）	2	2 （60）		
		生活支援技術Ｅ（演習）	1	1 （30）		
		介護過程Ⅰ（演習）	2	2 （60）	5（150）	
		介護過程Ⅱ（演習）	3	3 （90）		
		介護総合演習（演習）	2	2 （60）	2 （60）	
		介護実習Ⅰ（実習）	4	1 （50）	4（210）	
		介護実習Ⅱ（実習）		3 （160）		
小　計			35	35 （960）	35 （960）	
こころとからだのしくみ		発達と老化の理解（講義）	2	2 （30）	2 （30）	
		認知症の理解（講義）	4	4 （60）	4 （60）	
		障害の理解（講義）	2	2 （30）	2 （30）	
		こころとからだのしくみＡ（演習）	1	1 （30）	2 （60）	
		こころとからだのしくみＢ（演習）	1	1 （30）		
小　計			10	10（180）	10 （180）	
医療的ケア		医療的ケア（演習）	2	2 （60）	2 （60）	
小　計			2	2 （60）	2 （60）	
合　計			49	49（1,230）	49（1,230）	

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
こころとからだのしくみA・B	演　習	遠藤　由美子

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
30回	60時間（2単位）	専攻科　前期・後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

身体構造と心身機能を理解し、介護技術の根拠や実践に必要な知識を養う。

〔授業全体の内容の概要〕

「こころ」と「からだ」はどのように相互作用しながら人は生きているのかを理解し、それらを活用しながら実際の援助をどのように行っていくかを、演習を重ねながら考えていきます。そして、個々の身体状況に合わせた介護実践の展開の方法を学びます。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

心のしくみを理解する。
体のしくみを理解する。
心と体のしくみを理解した上での介護実践の根拠を考える。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　健康とは
2　こころのしくみの理解　基本的欲求・社会的欲求
3　自己概念と尊厳　自己概念に影響する要因　自己実現と生きがい
4　心のしくみの基礎　思考のしくみ
5　学習・記憶・感情のしくみ
6　意欲・動機付け・適応のしくみ
7　からだのしくみの理解　生命の維持・恒常性のしくみ
8　人体部位の名称
9　体の動き　骨・筋肉・神経
10　ボディメカニクス・関節の可動域
11　身じたくに関連したこころとからだのしくみ
12　心身の機能低下が身じたくに及ぼす影響
13　生活場面における変化の気づきと対応
14　移動に関連したこころとからだのしくみ
15　筆記試験と解説　16
心身の機能低下が移動に及ぼす影響
17　生活場面における変化の気づきと対応
18　食事に関連したこころとからだのしくみ
19　心身の機能低下が食事に及ぼす影響
20　生活場面における変化の気づきと対応
21　入浴・清潔保持に関連したこころとからだのしくみ
22　心身の機能低下が入浴・清潔保持に及ぼす影響
23　生活場面における変化の気づきと対応
24　排泄に関連したこころとからだのしくみ
25　心身の機能低下が排泄に及ぼす影響
26　睡眠に関連したこころとからだのしくみ
27　心身の機能低下が睡眠に及ぼす影響
28　死にゆく人のこころとからだのしくみ　生物学的な死、法律的な死・臨床的な死
29　終末期から「死」までの変化「死」に対するこころの理解
30　筆記試験と解説

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
新・介護福祉士養成講座 14「こころとからだのしくみ」第3版　中央法規出版	①課題レポート・提出物 ②定期試験 以上2つの観点から総合的に評価する。 （60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
医療的ケア	演習	遠藤　由美子

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
45	60時間（2単位）	専攻科	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

人のからだのしくみについて理解をし、吸引や経管栄養の方法を十分に理解し、安全で安楽な吸引や経管栄養を実施出来る知識や技術を身につける。

〔授業全体の内容の概要〕

医療的ケア実施に当たり、基礎知識として関連制度や倫理、関連職種の役割、救急蘇生法、感染予防及び健康状態の把握の方法などについて知識習得をする。
喀痰吸引では、人体の構造と機能及び吸引を行う部位の確認、小児の吸引、急変時の対応などを習得する。また演習において、喀痰吸引実施に必要な基礎知識と実施手順を繰り返し行う。経管栄養では、人体の構造と機能及び経管栄養を行う部位の確認、小児の吸引、急変時の対応などを習得する。また、演習において経管栄養実施に必要な基礎知識と実施手順を繰り返し行う。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

医療的ケアの意義が説明できる。
個人の尊厳と自立について説明が出来る。
医療的ケアを受ける利用者や家族の気持ちの理解が出来る。
安全に喀痰吸引や経管栄養の実施が出来る。
高齢者や障害児・者の医療的ケアの必要性について理解が出来ており説明が出来る。
感染予防の重要性と必要性について説明が出来る。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　オリエンテーション　人間と社会（個人の尊厳と自立　医療の倫理　利用者や家族の気持ちの理解）
2　保健医療制度とチーム医療
3　清潔保持と感染予防　①感染予防　職員の感染予防　療養環境の清潔・消毒法
4　実習室の使い方　演習：実際に手を洗ってみよう
5　②滅菌と消毒
6　健康状態の把握
7　演習：実際にバイタルサインを測ってみよう
8　高齢者および障害児・者の喀痰吸引概論　①呼吸のしくみと働き
9　②喀痰吸引とは
10　③演習：実際に器具を手にとってさわってみよう
11　④人工呼吸器と吸引
12　⑤子どもの吸引について
13　⑥吸引を受ける利用者や家族の気持ちと対応、説明と同意
14　⑦演習：実際にロールプレイを行ってみよう
15　⑧呼吸器系の感染と予防（吸引と関連して）
16　喀痰吸引で用いる器具・器材とそのしくみ、清潔の保持吸引の技術と留意点
17　①　演習（DVDを見ながらやってみよう）
18　②　演習（読み上げリードに沿ってやってみよう）
19　③　演習（実技テスト・補講）
20　喀痰吸引にともなうケア　報告及び記録
21　喀痰吸引ヒヤリハット・アクシデントの実際　演習
22　安全な療養生活　①喀痰吸引の安全な実施
23　②急変状態について（いつもと違う呼吸状態・急変・事故発生時の対応と事前対策）
24　喀痰吸引により生じる危険、事後の安全確認・喀痰吸引まとめテスト（筆記）
25　高齢者および障害児・者の経管栄養概論　①消化器系のしくみとはたらき消化
26　②吸収とよくある消化器の症状
27　③経管栄養とは
28　④注入する内容に関する知識
29　⑤経管栄養実施上の留意点

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
医療的ケア　メジカルフレンド社	講義　①課題レポート・提出物　②まとめテスト 以上2つの観点から総合的に評価する。（60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」とする。） 演習　厚生労働省基準に準ずる（5回目のテストで合否判定（筆記試験・演習共に合格しければ単位は認めない）

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
発達と老化の理解	講　義	遠藤　由美子

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（2単位）	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

発達の観点から老化を理解し、老化による心理的変化や身体的変化の特徴について、基礎知識を習得する。

〔授業全体の内容の概要〕

人間の一生の中での老年期を意識しながら、老化による心身の変化や環境の変化が及ぼす様々な影響について理解を深め、高齢者への援助の基本を学ぶ。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1）誕生から死に至るまでの正常な成長・発達と各期の課題と援助について理解する。
2）正常な発達を理解した上で、加齢による心身の変化や喪失体験などについて知り、どのような配慮や支援が必要かを考える。
3）高齢者の人格と尊厳を守る援助の基本について理解できる。
4）高齢者に多い疾患や老化による機能低下とそれらが日常生活へ及ぼす影響を理解し、日常生活支援技術の根拠となる知識を習得できる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1.オリエンテーション（授業の進め方・発達とは・老化とは）
2. 老年期の発達課題の留意点
3.老いの価値観と受容
4.高齢者のこころの問題と精神障害
5.老化に伴う身体機能の変化と日常生活への影響①姿勢・皮膚・免疫・感覚・平衡
6.老化に伴う身体機能の変化と日常生活への影響②咀嚼・消化器・循環器・呼吸器・筋肉
7.老化に伴う知的機能の変化と日常生活への影響
8.高齢者の症状・疾患の特徴
9.高齢者に多い症状・訴えとその留意点①
10.高齢者に多い病気とその留意点②：生活習慣病
11.高齢者に多い病気とその留意点③：特定疾病・感覚器
12.高齢者に多い病気とその留意点④：腎臓・泌尿器
13.高齢者に多い病気その留意点⑤脳・神経系
14.保健医療職との連携（グループワーク）
15.筆記試験

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
新・介護福祉士養成講座「発達と老化の理解」中央法規 「介護福祉士　国試ナビ2018」中央法規	筆記試験 授業評価方法：　筆記試験：授業参加態度＝　3:2 授業3～13　小テストあり（小テスト点数は授業参加態度内で加点対象） 随時レポートあり（授業参加態度内で加点対象）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
社会の理解	講　義	小林　　根

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(2単位)	専攻科・前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

1　社会福祉制度と生活の関係を理解した上で、高齢者を取り巻く状況と社会的背景について学ぶ。
2　社会保障にかかわる制度を広く理解する。
3　老人福祉法、老人保健法および介護保険制度の概要とサービスの体系、内容および手続き等、具体的な実践活動を理解させる。

〔 授業全体の内容の概要 〕

・基本的な社会福祉制度の概要を解説するとともに、少子高齢化社会の動向を詳細に理解させる。
・高齢者の諸問題に触れるとともに、高齢者の福祉制度や具体的援助方法を理解させる。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1　日本の高齢者福祉の現状把握と、高齢者が抱える諸問題を理解できるようにする。
2　福祉の法制度や介護保険の体系について理解を深め、それを実習等の実践の場で活用できるようにする。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　生活と福祉
　家族と地域社会の抱える諸問題
2　少子高齢社会の到来と意義
　人口高齢化の要因(平均寿命の伸長と合計特殊出生率の低下)
3　高齢者を取り巻く諸問題
　高齢者の健康不安
4　高齢者を取り巻く諸問題
　家族介護者の現状
5　高齢者のための総合対策
　高齢者のための社会保障制度(生活保護制度の概要)
6　障害者を取り巻く諸問題
　障害者自立支援法の現状について
7　障害者の就労状況・経済状況および家族・地域社会の現状
　障害者自立支援法の支援サービスの他系(施設サービスと居宅サービス)
8　老人福祉法
　理念と目的・および概要
9　老人福祉法
　給付サービスの体系
10　介護保険制度
　介護保険法の概要
11　介護保険制度
　給付サービスの体系
12　介護実践に関連する諸制度(保健・医療・福祉に関する施策)
　老人保健法の概要と保健事業
13　介護実践に関連する諸制度(個人の人権を守る制度)
　成年後見制度と個人情報保護法
14　介護実践に関連する諸制度(介護と関連領域との連携に必要な法規)
　年金制度と高齢者雇用制度
15　授業のまとめとテスト

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
新・介護福祉士養成講座「社会と制度の理解」 中央法規出版	筆記試験を行う。 60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」とし、単位を認定する。

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
介護の基本A	講　義	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(2単位)	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

介護福祉士を取り巻く社会状況から、その誕生の背景および社会的役割を理解する。
介護サービス利用者の尊厳を支える専門職者としての基本的姿勢を獲得する。

〔 授業全体の内容の概要 〕

介護を必要とする人の尊厳ある生活を支援する専門職者としての基本的な考え方を学ぶ。
介護とは何か、介護福祉士の役割とは何かの理解を目指し、講義だけでなく、グループディスカッションやレポート作成を取り入れ、多角的に学んでいく。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

・介護福祉士誕生にいたる歴史的背景を理解し、その上で現在の介護福祉士を取り巻く社会状況を認識できる。
・介護福祉士に求められる社会的役割を理解する。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　オリエンテーション、「介護の基本A」を学ぶ必要性・意義
　「介護」とは
2　介護福祉士を取り巻く状況①
　日本の介護の歴史
3　介護福祉士を取り巻く状況②
　少子高齢化社会と家族形態の変化
4　介護福祉士を取り巻く状況③
　高齢者虐待などの事件が発生する背景について
5　介護福祉士を取り巻く状況④
　社会のニーズの変化に伴う介護の社会化措置から契約へ
6　介護福祉士の役割と機能を支える仕組み①
　介護福祉士の定義、義務社会福祉士および介護福祉士法の改正ポイント
7　介護福祉士の役割と機能を支える仕組み②
　介護福祉士の養成制度
8　介護福祉士の役割と機能を支える仕組み③
　名称独占と業務独占の意味
9　尊厳を支える介護①
　「老い」、「病」とは
10　尊厳を支える介護②
　自己実現とQOLの関係
11　尊厳を支える介護③
　ノーマライゼーションの理念
12　尊厳を支える介護④
　その人らしさについて
13　尊厳を支える介護⑤
　利用者本位とは
14　まとめ①
　学ぶ前の自分と現在の自分の変化について
15　まとめ②
　授業総括

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
最新介護福祉全書「介護の基本」メヂジカルフレンド社	①出欠・遅刻・早退状況　②筆記試験又はレポート課題 以上2つの観点から総合的に評価する。（60～69点を「可」・70点～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
介護の基本A	講　義	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(2単位)	専攻科　後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

介護を必要とする人の多様性を理解する。
介護の新しい基本理念である「自立支援」について学習し、介護サービス利用者の生活を支える意義や実践について理解を深める。

〔 授業全体の内容の概要 〕

介護を必要とする人の尊厳ある生活を支援する専門職者としての基本的な考え方を学ぶ。
介護とは何か、介護福祉士の役割とは何かの理解を目指し、講義だけでなく、グループディスカッションやレポート作成を取り入れ、多角的に学んでいく。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

・介護サービス利用者は、「なぜ介護を必要としているのか」を多角的に理解する
・介護の基本理念としての「自立支援」の考え方を理解する。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　オリエンテーション
　後期「介護の基本A」の授業展開について
2　介護を必要とする人の理解①
　人間の多様性について①
3　介護を必要とする人の理解②
　人間の多様性について②
4　介護を必要とする人の理解③
　高齢者の暮らしの実際①　高齢者の価値観、生活観
5　介護を必要とする人の理解④
　高齢者の暮らしの実際②　事例検討
6　介護を必要とする人の理解⑤
　障害者の暮らしの実際①　障害者の生活の実際
7　介護を必要とする人の理解⑥
　障害者の暮らしの実際②　障害者の生活ニーズ、生活を支える制度
8　介護を必要とする人の理解⑦
　介護分野における高齢者、家族、地域、社会の結びつきについて
9　自立に向けた介護①
　自立と自律について
10　自立に向けた介護②
　自己決定、自己選択の意味と意義
11　自立に向けた介護③
　ICFの基本的理解障害という概念の捉え方
12　自立に向けた介護④
　リハビリテーションの概念
13　自立に向けた介護⑤
　介護保険と介護予防
14　自立に向けた介護⑥
　事例検討
15　まとめ②
　授業総括

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
最新介護福祉全書「介護の基本」メヂジカルフレンド社	①出欠・遅刻・早退状況　②筆記試験又はレポート課題 以上2つの観点から総合的に評価する。（60～69点を「可」・70点～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
介護の基本B	講　義	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(2単位)	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

介護福祉士を取り巻く社会的状況と課題に目を向け、専門職としての社会的役割を理解する。

〔 授業全体の内容の概要 〕

介護福祉士を取り巻く課題について広い視野から考え、知識の習得だけではなく、自分の考えを伝える、まとめていく力をつける。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1　専門職として介護福祉士に求められる社会的役割を理解する。
2　介護実践におけるチームとは何か、多職種の役割を学び、連携方法を理解する。
3　生活上の課題の解決のために必要なサービスや、地域の中の社会資源を理解する。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　介護従事者の倫理　専門職としての倫理

2　介護従事者の倫理　介護実践で求められる倫理

3　介護従事者の倫理　日本介護福祉士会倫理綱領について

4　介護サービスについて　介護サービスの特性について

5　介護サービスについて　介護サービスとケアマネジメント

6　介護サービスについて　ケアプラン、ケアマネジメントの流れとしくみ

7　介護サービスについて　介護保険の種類と、サービスの報酬、算定基準

8　介護サービスについて　介護サービス提供の場の特性①在宅

9　介護サービスについて　介護サービス提供の場の特性②通所施設

10　介護サービスについて　介護サービス提供の場の特性③グループホーム

11　介護サービスについて　介護サービス提供の場の特性④介護老人福祉施設・介護老人保健施設

12　介護サービスについて　介護サービス提供の場の特性⑤障害者(児)施設

13　介護サービスについて　介護サービス提供の場の特性⑥介護療養型施設

14　まとめ　1～13までの各項目

15　筆記試験と授業評価

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
最新介護福祉全書「介護の基本」メヂジカルフレンド社	①出欠・遅刻・早退状況　②筆記試験又はレポート課題 以上2つの観点から総合的に評価する。(60～69点を「可」・70点～79点を「良」・80点以上を「優」とする。)

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
介護の基本B	講　義	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(2単位)	専攻科　後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

介護福祉士を取り巻く社会的状況と課題に目を向け、専門職としての社会的役割を理解する。

〔 授業全体の内容の概要 〕

介護福祉士を取り巻く課題について広い視野から考え、知識の習得だけではなく、自分の考えを伝える、まとめていく力をつける。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1　専門職として介護福祉士に求められる社会的役割を理解する。
2　介護実践におけるチームとは何か、多職種の役割を学び、連携方法を理解する。
3　生活上の課題の解決のために必要なサービスや、地域の中の社会資源を理解する。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　介護実践における連携　介護実践をするための多職種の連携の必要について

2　介護実践における連携　多職種連携の意義と目的

3　介護実践における連携　他の福祉職種の機能と役割について

4　介護実践における連携　保健医療職種の機能と役割、連携について

5　介護実践における連携　施設内での多職種連携について

6　介護実践における連携　地域連携について①地域連携の意義と目的

7　介護実践における連携　地域連携について②フォーマルサービスとインフォーマルサービス

8　利用者の人権と介護　身体拘束について①身体拘束とは

9　利用者の人権と介護　身体拘束について②身体拘束を行わない為に

10　利用者の人権と介護　高齢者虐待・高齢者虐待防止法

11　利用者の人権と介護　児童虐待・児童虐待防止法

12　利用者のプライバシー保護　個人情報保護・個人情報保護法

13　利用者のプライバシー保護　プライバシー保護まとめ

14　まとめ　1～13までの各項目

15　試験と授業評価

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
最新介護福祉全書「介護の基本」メヂジカルフレンド社	①出欠・遅刻・早退状況　②筆記試験又はレポート課題 以上2つの観点から総合的に評価する。（60～69点を「可」・70点～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
介護の基本C	演　習	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(2単位)	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

生活者としての利用者が安心して生活できる環境を整えるため、介護の場における事故防止や安全対策、感染対策の重要性が理解できるようになる。
介護従事者の安全に関する理念や理論、知識を学び、生活支援技術、介護実習に役立てられるようになる。

〔 授業全体の内容の概要 〕

介護における安全を確保するための知識・技術・事故防止や安全の対策、感染予防、緊急時対応、介護従事者の健康管理等について、施設や在宅での具体例、実習体験をもとに展開する。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

介護における安全の確保の重要性を理解し、具体的場面でセーフティマネジメントが展開できるようになる。
介護従事者の安全、健康管理のために知識、技術を身につける。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　オリエンテーション
　本科目の位置づけや意義、目的
2　介護における安全の確保
　介護における安全の確保の重要性
3　介護における安全の確保
　安全確保のためのリスクマネジメント
4　介護における安全の確保
　介護・医療における最近の出来事を取り上げ、事故報告書、危険予知トレーニングシートを作成する
5　介護における安全の確保
　作成した事故報告書、危険予知トレーニングシートから、事故の原因と今後の対策を話し合い、発表する。
6　安全確保のためのリスクマネジメント
　リスクマネジメントとは
7　安全確保のためのリスクマネジメント
　施設の中でおこりやすい事故について話し合い、要因ごとに分類して発表する
8　安全確保のためのリスクマネジメント
　在宅でおこりやすい事故について話し合い、要因ごとに分類して発表する
9　事故防止、安全対策
　事故防止、安全対策のためのリスクマネジメントのしくみ
10　事故防止、安全対策
　文献等に掲載されているヒヤリ・ハット事例や、日常生活で体験したヒヤリ・ハットについて報告書を作成する。
11　事故防止、安全対策
　作成したヒヤリ・ハット報告書から安全対策を考え、発表する
12　緊急時対応
　緊急・事故対応、救急対応の実際
13　防火・防災対策
　地域における防災対策について調べてきて発表する
14　災害時での対応
　災害時ネットワーク、緊急時判断について。「浮き輪のワーク」

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
最新介護福祉全書「介護の基本」メヂジカルフレンド社	①出欠・遅刻・早退状況　②筆記試験又はレポート課題 以上2つの観点から総合的に評価する。（60～69点を「可」・70点～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
介護の基本C	演　習	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(2単位)	専攻科　後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

生活者としての利用者が安心して生活できる環境を整えるため、介護の場における事故防止や安全対策、感染対策の重要性が理解できるようになる。
介護従事者の安全に関する理念や理論、知識を学び、生活支援技術、介護実習に役立てられるようになる。

〔 授業全体の内容の概要 〕

介護における安全を確保するための知識・技術・事故防止や安全の対策、感染予防、緊急時対応、介護従事者の健康管理等について、施設や在宅での具体例、実習体験をもとに展開する。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

介護における安全の確保の重要性を理解し、具体的場面でセーフティマネジメントが展開できるようになる。
介護従事者の安全、健康管理のために知識、技術を身につける。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　感染管理のための方策
　生活の場における感染対策
2　感染管理のための方策
　高齢者介護施設の感染対策について調査し、発表する
3　感染管理のための方策
　感染対策のための基礎知識
4　感染管理のための方策
　感染発生時の対応
5　感染管理のための方策
　感染リスクマネジメント
6　介護従事者の安全
　健康管理の意義と目的
7　介護従事者の安全
　こころの健康管理(ストレスについて)
8　介護従事者の安全
　こころの健康管理(燃え尽き症候群)
9　介護従事者の安全
　こころの健康管理(スーパービジョン)
10　介護従事者の安全
　卒業生の話から、介護福祉士としてのこころの健康管理対策を考える
11　介護従事者の安全
　身体の健康管理(腰痛予防と対策)
12　介護従事者の安全
　労働安全について
13　介護従事者の安全
　安心して働ける職場づくりについてグループディスカッション
14　介護における安全とリスクマネジメント、介護従事者の安全のまとめ
　テーマ別にグループで討議し、安全対策マニュアルを作成する
15　まとめ
　安全対策マニュアルの発表

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
最新介護福祉全書「介護の基本」メヂジカルフレンド社	①出欠・遅刻・早退状況　②筆記試験又はレポート課題 以上2つの観点から総合的に評価する。(60～69点を「可」・70点～79点を「良」・80点以上を「優」とする。)

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
コミュニケーション技術A	演　習	稲富　正治

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（1単位）	専攻科・後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

介護現場で必要とされる人間関係形成を築くためのコミュニケーション技術、および介護実践で必要とさ

〔授業全体の内容の概要〕

ロールプレイ、グループディスカッション、ワーク等を体験しながら、介護場面で活用できる具体的なコミュニケーション技術習得する
また記録、報告、会議の方法について実践から学んでいく。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

対人援助職として円滑なコミュニケーション技術を身につける。
介護におけるチームのコミュニケーションに必要な記録や報告等について、その技術を習得する。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　オリエンテーション
　授業概要の説明、アイスブレイク、自己紹介
2　介護におけるコミュニケーションの基本
　介護におけるコミュニケーションの意義と目的、信頼関係を成立させるということ
3　介護におけるコミュニケーションの基本
　援助者としての自己理解（自己覚知）
4　介護におけるコミュニケーションの基本
　価値観と他者への理解
5　介護におけるコミュニケーションの基本
　話を聴く技法（傾聴訓練）
6　介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション
　受容と共感
7　介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション
　家族とのコミュニケーション
8　介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション
　障害のある利用者とのコミュニケーション
9　介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション
　プロセスレコードからの自己覚知と他者理解
10　介護におけるチームのコミュニケーション
　報告、記録の方法
11　介護におけるチームのコミュニケーション
　会議の方法、留意点
12　介護におけるチームのコミュニケーション
　カンファレンスの方法
13　その他のコミュニケーション技法
　プレゼンテーションの方法
14　その他のコミュニケーション技法
　アサーション
15　まとめ
　対人援助職として習得しなければならないコミュニケーション技術について

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
「介護スタッフのためのケア・コミュニケーション」 ㈱ウイネット	筆記試験 60～69点「可」・70～79点「良」・80点以上を「優」とし、単位を認定する。

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
コミュニケーション技術B	演　習	高山香奈江・前中　郁・安東茂樹

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修 ・選択
15回（1単位）	30時間（1単位）	専攻科・前期	必　修

〔 授業の目的 ・ねらい 〕

高齢者及びコミュニケーション障害のある利用者に対する理解を深め、コミュニケーションの実践に必要とされる技術を修得する。

〔授業全体の内容の概要〕

コミュニケーション障害のある利用者の理解を深め、コミュニケーション技術習得のために手話、点字等を学ぶ。
高齢者とのコミュニケーション技術としての回想法の実際の理論と実践を学ぶ。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

コミュニケーション技術Aで習得した介護におけるコミュニケーションの基本を活用し、自分を表現する力、他者を理解する力を身につける。
グループ内でのサポーティブな関係作りの実践方法とグループ運営ができるようになる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　手話に関する基礎知識
2　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　手話で会話する
3　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　手話で歌う
4　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　シニアサイン
5　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　手話で会話する（実技テスト）
6　介護場面における利用者、家族とのコミュニケーション
　音楽療法の基礎理論
7　介護場面における利用者、家族とのコミュニケーション
　音楽療法の進め方
8　介護場面における利用者、家族とのコミュニケーション
　音楽を用いた回想コミュニケーション
9　介護場面における利用者、家族とのコミュニケーション
　介護現場での音楽療法の実際
10　介護場面における利用者、家族とのコミュニケーション
　音楽療法プログラムの作り方（実技テスト）
11　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　社会福祉施設におけるコミュニケーションの実際（高齢者とのコミュニケーション）
12　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　社会福祉施設におけるコミュニケーションの実際（認知症の人とのコミュニケーション）
13　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　介護実習振り返り・実習でのコミュニケーション体験をグループワークで共有
14　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　グループワークで抽出した介護実習での事例を用いてロールプレイング
15　利用者の状況、状態に応じたコミュニケーション技法の実際
　確認テストおよび授業のまとめ

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
「身ぶり手ぶりで楽楽コミュニケーション」中央法規出版 「介護予防＋認知症予防プログラム　歌あそび・歌体操」あおぞら音楽社	レポート＆実技試験 60～69点「可」・70～79点「良」・80点以上を「優」とし、単位を認定する。

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
生活支援技術A	演　習	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間(1単位)	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕
生活の概念や生活支援の考え方を理解する。

〔 授業全体の内容の概要 〕
介護を必要とする人の生活をICFの概念でアセスメントし、自立へ向けての援助について理解する。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕
ICFの概念について理解できる。
日常生活における環境因子の重要性が理解できる。
個別性を尊重した自立支援の方法が分かる。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕
コマ数
1　生活とは何か

2　生活機能の具体的行為

3　摂食行為

4　排泄行為

5　入浴行為

6　介護場面における生活とは・生活支援

7　ICFとは

8　環境因子とは

9　ICFの用語を使って事例について考える

10　活動と活動制限

11　参加と参加制約

12　認知症高齢者へのICF的アプローチ

13　ターミナルにおけるICF的な関わりについて学ぶ

14　介護場面におけるニーズとは

15　介護職に求められる基本的態度

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
新・介護福祉士養成講座生活支援技術Ⅰ（中央法規）	出欠、遅刻、早退状況と筆記試験及びレポート課題を総合的に評価する （60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
生活支援技術B	演　習	生井美奈・木田茂樹

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修 ・選択
30回（2コマ）	120時間（4単位）	専攻科　前期・後期	必　修

〔 授業の目的 ・ねらい 〕

「尊厳の保持」「自立支援」という新しい介護の考え方を理解すると共に「介護を必要とする人」を、生活

〔授業全体の内容の概要〕

介護に必要な視点を学ぶと共に、自立へ向けての援助とは何かを、様々な生活場面での具体的援助方法を身につける。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

個別性を尊重した自立支援の方法が分かる。
日常生活における基本的介護技術が習得できる。
安全・安楽・快適な介護が実践できる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　観察技法と介護アセスメント
2　生活空間と介護
3　ベッドメイキング
4　臥床したままのシーツ交換
5　運動・移動の介護
6　自立に向けた移動の介護
7　キネステティクス
8　自立に向けた身じたくの介護（洗面・整髪・髭の手入れ・爪・化粧）
9　口腔の清潔
10　衣服の着脱（座位）
11　衣服の着脱（臥位）
12　自立にむけた安全で適切な食事介助の技法
13　自立に向けた排泄の介護　排泄の意義・目的
14　排泄介助の実際
15　自立に向けた入浴・清潔保持の介護
16　入浴介助の実際
17　福祉機器全般について
18　実習で体験した介護技術の振り返り
19　基本的介護技術の確認
20　マッサージ・罨法についての介護
21　睡眠の意義と目的
22　自立に向けた睡眠の介護
23　受診時の介護
24　服薬の介護
25　感染予防
26　体調不良時の対応
27　終末期の介護
28　事例から学ぶ介護技術 前半
29　事例から学ぶ介護技術 後半
30　筆記試験・実技試験

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
新・介護福祉士養成講座「生活支援技術Ⅱ」中央法規出版	（レポート・筆記試験・実技試験）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
生活支援技術C	演　習	佐藤　大輔

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（1単位）	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

1　生活者としての介護対象の特性を理解するために必要な知識を習得する。
2　障害を理解し個別性を重視した生活支援のための知識・技術を習得する。

〔授業全体の内容の概要〕

疾病・障害の理解を深め多様な介護対象への援助についての講義および演習。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1　介護対象を多角的に捉える視点が身につく。
2　疾病・障害と実際の生活支援の結びつきが理解できる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　障害児・者の生活支援の基本
　障害の捉え方と障害児・者の生活支援の基本
2　運動機能障害のある対象の生活支援技術
　運動機能障害の解剖生理学的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解
3　内部障害のある対象の生活支援技術(1)
　心臓機能障害の解剖生理学的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解(1)
4　内部障害のある対象の生活支援技術(2)
　心臓機能障害の解剖生理学的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解(2)　グループワーク
5　内部障害のある対象の生活支援技術(3)
　呼吸機能障害の解剖生理学的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解
6　内部障害のある対象の生活支援技術(4)
　腎臓機能障害の解剖生理学的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解
7　内部障害のある対象の生活支援技術(5)
　排泄機能障害の解剖生理学的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解
8　視覚障害のある対象の生活支援技術
　視覚障害体験から対象の理解を深め実際のガイドヘルプの理解
9　聴覚障害のある対象の生活支援技術
　聴覚障害のある対象の生活支援の理解
10　言語障害のある対象の生活支援技術(1)
　言語機能と脳機能の解剖生理学的理解
11　言語障害のある対象の生活支援技術(2)
　失語症と構音障害がある対象の理解
12　認知症のある対象の生活支援技術
　認知症の基本視点（事例研究）
13　まとめ　前半

14　まとめ　後半

15　筆記試験と解説

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
新・介護福祉士養成講座8「生活支援技術Ⅲ」中央法規出版 新版「病気の地図帳」講談社	筆記試験を行い、60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」として、単位を認定する。

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
生活支援技術C	演　習	佐藤　大輔

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（1単位）	専攻科　後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

1　生活者としての介護対象の特性を理解するために必要な知識を習得する。
2　障害を理解し個別性を重視した生活支援のための知識・技術を習得する。

〔授業全体の内容の概要〕

疾病・障害の理解を深め多様な介護対象への援助についての講義および演習。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1　介護対象を多角的に捉える視点が身につく。
2　疾病・障害と実際の生活支援の結びつきが理解できる。
3　介護対象に応じての介護技術が理解・実施できる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　発達障害のある対象の生活支援技術
　発達障害の理解とその対象に対する生活支援の理解
2　精神障害のある対象の生活支援技術(1)
　内因性精神障害の疾患的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解(1)
3　精神障害のある対象の生活支援技術(2)
　内因性精神障害の疾患的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解(2)
4　高次脳機能障害のある対象の生活支援技術(1)
　脳血管障害の疾患的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解(1)
5　高次脳機能障害のある対象の生活支援技術(2)
　脳血管障害の疾患的理解と実際の生活支援に対する知識と技術の理解(2)
6　高次脳機能障害のある対象の生活支援技術(3)
　高次脳機能障害のある対象の全体像の理解と実際の演習(3)
7　重複障害のある対象の生活支援技術(1)
　重症心身障害者と生活の理解
8　重複障害のある対象の生活支援技術(2)
　重症心身障害者の生活支援と環境整備
9　重複障害のある対象の生活支援技術(3)
　重症心身障害者に対する援助過程と他職種との連携
10　全介助を要する対象の生活支援技術(1)
　長期臥床状態を引き起こす疾患・障害の理解(1)
11　全介助を要する対象の生活支援技術(2)
　長期臥床状態を引き起こす疾患・障害の理解(2)
12　全介助を要する対象の生活支援技術(3)
　長期臥床状態を引き起こす疾患・障害の理解(3)
13　まとめ　前半

14　まとめ　後半

15　筆記試験と解説

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
新・介護福祉士養成講座8「生活支援技術Ⅲ」中央法規出版 新版「病気の地図帳」講談社	筆記試験を行い、60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」として、単位を認定する。

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
生活支援技術D	演　習	生井　美奈

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回(2コマ)	60時間(2単位)	専攻科　後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

「尊厳の保持」「自立支援」という新しい介護の考え方を理解すると共に「介護を必要とする人」を生活の観点から捉え、生活支援の理念と方法について学ぶ。

〔 授業全体の内容の概要 〕

家庭生活全般および衣生活・食生活・住生活について、その役割と機能を理解し、健康で快適な生活ができるような自立へ向けての援助方法を身につける。

〔 授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1　生活のあり方と営み方を考え、営みの基本を身につける。
2　食事の意義や個別性を尊重した食事を提供できるよう知識と技術を学ぶ。
3　被服生活、身じたくの意義を理解するとともにその具体的支援法を学ぶ。
4　住居生活の意義を理解し、自立に向けた居住環境整備の意味とその方法を学ぶ。

〔 授業計画と各回テーマ・内容・授業方法 〕

コマ数

1　生活支援の理念と目的を理解し、人間の営み(生活)の意義を考える

2　生活経営と生活設計を学び、生活時間の管理から介護と家事の生活支援を考える

3　家計に関する知識を学び、その経営と消費生活での留意点と高齢者・障害者支援を考える

4　食生活の基本的知識、栄養の理解

5　調理の基本、食品の基礎知識

6　高齢者の食事・調理、障害者の食事・調理の理解と生活支援

7　被服生活の基本、被服の役割と機能を理解したうえでの生活支援

8　高齢者・障害者の被服(寝具も含む)生活

9　住まいの役割　安心で快適な家庭生活の場づくり

10　高齢者・障害者の住居、自立に向けた住居環境の整備

11　被服生活支援に役立つ技術を生かした　被服実習

12　高齢者の食事のための調理の基本　調理実習Ⅰ

13　高齢者に向けた食事と調理の工夫　調理実習Ⅱ

14　高齢者に向けた食事と調理の工夫・応用編　調理実習Ⅲ

15　衣食住(家庭生活・家事)の生活支援、まとめ　テスト

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
新・介護福祉士養成講座「生活支援技術Ⅰ」（第3版）　中央法規	出欠・遅刻・早退状況、筆記試験及び実技試験を行い、総合的に評価する （60～69点を「可」・70点～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
生活支援技術E	演　習	渡辺　潤一・木田　茂樹

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（1単位）	専攻科 前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

たとえ障害をもち、介護が必要な状況になったとしても、その人の人生においてQOLの向上をめざし
日々の生活において楽しみを見出せる援助ができるようになる。
生活場面において利用者の残存能力・潜在能力を引き出すことのできる、援助技術を習得する。

〔授業全体の内容の概要〕

高齢者及び障害者へのレクリエーション活動援助法について実践から学ぶ

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

レクリエーションの企画、実践ができるようになる
余暇活動の意義と目的を理解し、人生に楽しみを感じられる生活支援ができるようになる。
音楽、レクリエーション、癒しの心身への効果を自らが体感し、心身のリラックス、リフレッシュができる

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　レクリエーションの基本的理解について

2　介護現場におけるレクリエーションの考え方について

3　認知症高齢者へのレクリエーション援助について

4　障害者へのレクリエーション援助について

5　レクリエーション体験学習（スポーツ大会参加）

6　セラピューティックレクリエーションについて

7　A-PIE（エーパイ）プロセスについて

8　中間試験

9　介護現場におけるレクリエーション活動の実際①　VTR鑑賞

10　介護現場におけるレクリエーション活動の実際②　教員進行でレクリエーション参加

11　介護現場におけるレクリエーション活動計画の作成方法について①　概要説明

12　介護現場におけるレクリエーション活動計画の作成方法について②　グループワークにて計画書作成

13　介護現場におけるレクリエーション活動計画の作成方法について③　グループワークにて実践事前準備

14　レクリエーション実践①　グループごとにレクリエーション実践　前半

15　レクリエーション実践②　グループごとにレクリエーション実践　後半

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
	筆記試験と実技試験 60～69点「可」・70～79点「良」・80点以上を「優」とし、単位を認定する。

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
介護過程Ⅰ	演　習	小林　　根

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	60時間（2単位）	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

・生活支援技術等他の科目で学んだ知識や技術を集約して介護過程の展開に結びつけ、実習の場において、情報収集やアセスメント、介護計画の立案と実践及び評価ができる能力を養う。
・生活支援技術等他の科目で学んだ知識や技術を集約して介護過程の展開に結びつけ、実習の場において、情報収集や介護過程を通じて利用者の抱える身体的・精神的不全を理解し、効率的に援助し

〔授業全体の内容の概要〕

・介護過程Ⅰにおいては、介護過程の意義とその効果について講義し、ケアマネジメント等基本的な援助方法を解説してゆく。
・事例を通し、対象者のありのままの状態を的確にとらえ、目標の設定と計画の立案方法を教授する。
・事例を通し、ICFの視点に立った状態像モデルの記録方法やアセスメント用紙の記入方法を実践する。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

・アセスメント能力を身につけ対象者のニーズを的確に把握できるようにする。
・計画の立案と実践・評価の手順を理解し、授業で学んだ知識や技術を生かす方法を身につけるようにする。
・対人援助における介護過程の意義と重要性について理解できるようになる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　介護過程を学ぶにあたって
　介護過程の意義と目的
2　介護過程を学ぶにあたって
　生活支援における介護過程の意義と目的について
3　介護過程を学ぶにあたって
　ICFと介護過程との関係
4　介護過程を学ぶにあたって
　介護過程のケアマネジメント・介護保険制度での意義
5　介護過程を学ぶにあたって
　介護過程における問題解決の特徴
6　介護実践における介護過程の必要性
　介護過程の意味とその構成要素
7　介護実践における介護過程の必要性
　介護過程の対象とその理解
8　介護過程の理解と展開方法
　介護過程の全体像
9　介護過程の理解と展開方法
　介護過程における情報収集とアセスメント
10　介護過程の理解と展開方法
　介護過程におけるニーズの把握と課題の明確化
11　介護過程の理解と展開方法
　介護過程における計画の立案と目標の設定
12　介護過程の理解と展開方法
　介護過程における計画の実施と実施状況の把握
13　介護過程の理解と展開方法
　評価の目的と方法
14　介護過程における記録と報告の意義
　ICFモデルを使用した記録方法と介護過程のまとめ方
15　テストと授業の振返り

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
新しく学ぶ介護過程　久美株式会社	筆記試験を行い、60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」として評価する。

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
介護過程Ⅱ	演　習	小林　　根

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	60時間（2単位）	専攻科・後期①	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

介護過程が科学的な問題解決方法であることを理解するとともに、常なる振り返りのもとに進行・発展する

〔授業全体の内容の概要〕

実習Ⅱにおける介護過程の実践経験の振り返りを中心に、講義・グループディスカッション・レポート作成・事例検討などを通して、介護過程の実践的展開方法について多角的に学んでいく。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

・介護過程の展開に必要な知識と技術を身につけ、科学的な理解のもとに介護過程に取り組む意義を認識する

・介護サービス利用者の生活環境を広い視点で捉え考慮した上で、自立に向けた介護過程の展開ができるようになる

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　オリエンテーション
　後期授業展望、評価方法
2　介護過程の実践的展開①
　介護過程の展開（情報収集と分析に関する確認）
3　介護過程の実践的展開②
　介護過程の展開　（アセスメントに関する確認）
4　介護過程の実践的展開③
　介護過程の展開の実施に関する確認
5　介護過程の実践的展開④
　実習での介護過程実践の振り返り①　実践事例の共有
6　介護過程の実践的展開⑤
　実習での介護過程実践の振り返り②　実践事例をグループワークにて他者の見解を取り入れながら再構築
7　介護過程の実践的展開⑥
　実習での介護過程実践の振り返り③　報告会に向けての資料作成など
8　介護過程の実践的展開⑦
　振り返りで再構築した介護過程実践事例の報告会
9　自立に向けた介護過程の展開①
　特養・老健入居者の事例に学ぶ
10　自立に向けた介護過程の展開②
　通所介護利用者の事例から学ぶ
11　自立に向けた介護過程の展開③
　身体障害者療護施設入居者の事例から学ぶ
12　自立に向けた介護過程の展開④
　訪問介護実習時の体験の共有―事例を抽出しグループワークにて介護計画立案演習
13　自立に向けた介護過程の展開⑤
　前回のグループワークを元に報告会
14　専門職者として介護過程の展開の存在意義について考える
　課題に応じて自身の見解を小レポートの形で表現する
15　まとめ

（ 新しく学ぶ介護過程　久美株式会社	［単位認定の方法及び基準］ ①出欠・遅刻・早退状況　②授業内レポート ③グループワーク・発表への貢献度 以上3つの観点から総合的に100点満点で評価を行い、60～69点を「可」、70～79点を「良」、80点以上を「優」とする。

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
介護過程Ⅱ	演　習	木田　茂樹

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（1単位）	専攻科・後期②	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

実習経験を踏まえて、専門職として実践的な介護過程の展開とは何かを理解するとともに他職種との連携

〔授業全体の内容の概要〕

講義・グループディスカッション・レポート作成・事例検討などを通して、介護過程におけるチームアプローチの重要性と介護福祉士として求められる専門性について学んでいく。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

・専門職者としての実践的な介護過程の展開とは何か理解する
・介護過程におけるチームアプローチの実際について理解する

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　オリエンテーション
　後期授業展望、評価方法
2　ICFの基礎的理解
　ICFとICIDHとの対比から
3　ICFと介護過程の関係
　ICFの視点からの情報収集
4　利用者の生活と介護過程の展開①
　事例　在宅生活を営むALS患者のケース
5　利用者の生活と介護過程の展開②
　事例　独居高齢者のケース
6　利用者の生活と介護過程の展開③
　事例　精神障害のある人のケース
7　利用者の生活と介護過程の展開④
　事例　終末期の介護過程（看取りと家族ケア）
8　利用者の生活と介護過程の展開⑤
　事例　終末期の介護過程（評価と効果測定）
9　介護過程とチームアプローチ①
　ケースカンファレンス・サービス担当者会議の実際　　実習場面からの振り返り
10　介護過程とチームアプローチ②
　介護過程の展開における他職種との連携について
11　介護過程とチームアプローチ③
　関係職種それぞれの立場にわかれて模擬カンファレンス
12　介護過程とチームアプローチ④
　実習体験の共有→グループごとに一つの事例を抽出
13　介護過程とチームアプローチ⑤
　前回抽出した一事例をもとに介護過程の展開演習
14　事例検討発表会
　グループごとに介護過程の展開事例発表
15　まとめ

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
新しく学ぶ介護過程　久美株式会社	①出欠・遅刻・早退状況　②授業内レポート ③グループワーク・発表への貢献度 以上3つの観点から総合的に100点満点で評価を行い、60～69点を「可」、70～79点を「良」、80点以上を「優」とする。

授　業　概　要

授業のタイトル （科目名）	授業の種類	授業担当者
介護総合演習	演　習	木田　茂樹

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
30回（1コマ）	60時間（2単位）	専攻科　前期・後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

実習の教育効果を上げるために、実習に必要な知識や基本的態度を身につける。

〔授業全体の内容の概要〕

実習前には実習での基本的態度や施設についての理解を深め、実習課題を明確にする。
実習後には実習報告会や事例報告会において体験の意味付けをして知識と実践の統合を図る。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

実習の意義が理解できると共に実習での基本的態度が身に付く。
施設の理解が深まり、専門職としての役割が分かる。
実習体験の意味付けができると共に介護観が構築できる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　実習の意義と目的
2　自己覚知について
3　観察の視点と実習記録について
4　実習全般について
5　実習施設の理解　介護老人福祉施設・介護老人保健施設
6　実習施設の理解　身体障害者療養施設・重症心身障害児施設・知的障害者更生施設
7　実習施設の理解　グループホーム・小規模多機能施設・ケアハウス・通所介護
8　実習施設での感染予防
9　感染予防の実際　手洗い・ガウンテクニック
10　実習Ⅰの実習課題と目標について・必要書類
11　実習記録の書き方の実際・介護専門用語
12　実習Ⅰの施設の理解　グループワーク
13　実習Ⅰの実習報告会
14　実習Ⅰの実習報告会
15　筆記試験と振り返り
16　実習Ⅱについての理解
17　実習課題と目標について・必要書類について
18　実習先の理解　グループワーク
19　施設で使われる薬剤について
20　施設で行われている医療的処置について
21　バイタルチェック
22　実習終了後の記録の整理・お礼状の書き方
23　実習Ⅱの実習報告会
24　実習Ⅱの実習報告会
25　訪問介護実習についての基本的態度について
26　訪問介護実習の記録の書き方
27　実習で出会った理想の介護者とは
28　訪問介護実習で体験した事例についての報告会
29　訪問介護実習で体験した事例についての報告会
30　筆記試験と振り返り

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
新・介護福祉士養成講座「介護総合演習・介護実習」中央法規出版	①出欠・遅刻・早退状況 ②課題レポート 以上2つの観点から総合的に評価する。 60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」とする。

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
認知症の理解	講　義	木田　茂樹

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（2単位）	専攻科　前期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

認知症に関する基礎知識を習得するとともに、認知症の人の心身状態の特性を理解し、家族、地域を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点の獲得を目指す。

〔授業全体の内容の概要〕

講義形式だけでなく、グループディスカッション・VTR視聴・レポート作成・事例検討などを通して、認知症の人を取り巻くケア環境とそのケア方法について多角的に学んでいく。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

・認知症ケアの歴史と現状および認証の原因疾病の理解。
・認知症の行動障害が出現する背景について理解し、具体的なケアの実践につなげる方法を学ぶ。
・認知症の人を支える家族への支援、認知症ケアに対する地域社会のサポート体制について理解する。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　オリエンテーション
　前期授業展望、評価方法
2　認知症を取り巻く状況①
　認知症ケアの歴史
3　認知症を取り巻く状況②
　認知症ケアの理念と視点
4　認知症を取り巻く状況③
　認知症ケアの現状と課題
5　医学的側面から見た認知症の基礎①
　認知症の原因疾病
6　医学的側面から見た認知症の基礎②
　認知症の中核症状と周辺症状
7　医学的側面から見た認知症の基礎③
　認知症の人の行動・心理症状
8　医学的側面から見た認知症の基礎④
　認知症の診断と治療
9　医学的側面から見た認知症の基礎⑤
　認知症の人の世界観を想像してみる　ロールプレイ
10　認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活①
　認知症の人の特徴的な心理・行動
11　認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活②
　認知機能の変化が日常生活に及ぼす影響について
12　認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活③
　実習体験から事例を持ち寄り、グループディスカッション
13　認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活④
　VTR鑑賞『明日の記憶』（松井久子監督）
14　認知症に伴うこころとからだの変化と日常生活⑤
　VTR鑑賞振り返り　事例検討
15　まとめと試験

[使用テキスト・参考文献]	[単位認定の方法及び基準]
介護福祉士養成テキスト「認知症の理解」建帛社	①出欠・遅刻・早退状況　②課題レポート ③定期試験 以上3つの観点から総合的に評価する。 （60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
認知症の理解	講　義	木田　成樹

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（2単位）	専攻科　後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

認知症に関する基礎知識を習得するとともに、認知症の人の心身状態の特性を理解し、家族、地域を含めた周囲の環境にも配慮した介護の視点の獲得を目指す。

〔授業全体の内容の概要〕

講義形式だけでなく、グループディスカッション・VTR視聴・レポート作成・事例検討などを通して、認知症の人を取り巻くケア環境とその実際のケア方法について多角的に学んでいく。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

・認知症ケアの歴史と現状および認証の原因疾病の理解。
・認知症の行動障害が出現する背景について理解し、具体的なケアの実践につなげる方法を学ぶ。
・認知症の人を支える家族への支援、認知症ケアに対する地域社会のサポート体制について理解する。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　オリエンテーション
　後期授業展望、評価方法
2　認知症の人に対する介護①
　認知症の人とのコミュニケーション
3　認知症の人に対する介護②
　認知症の人への心理的アプローチ
4　認知症の人に対する介護③
　認知症ケアの目的
5　認知症の人に対する介護④
　認知症の人のターミナル
6　認知症の人に対する介護⑤
　認知症の人の権利　成年後見制度
7　連携と協働①
　地域におけるサポート体制
8　連携と協働②
　チームアプローチの実際
9　家族への支援①
　家族の認知症の受容過程での援助
10　家族への支援②
　家族へのレスパイトケア
11　家族への支援③
　家族介護の実際　事例から考える
12　家族への支援④
　家族介護の実際　事例から考える・グループワーク
13　認知症ケアの事例検証
　実習体験から事例を抽出し、グループで検討会を行う
14　認知症ケアの事例検討発表会
　グループごとの事例検討の結果を発表会の形で共有
15　まとめと試験

[使用テキスト・参考文献]	［単位認定の方法及び基準］
介護福祉士養成テキスト「認知症の理解」建帛社	①出欠・遅刻・早退状況　②課題レポート ③定期試験 以上3つの観点から総合的に評価する。 （60～69点を「可」・70～79点を「良」・80点以上を「優」とする。）

授　業　概　要

授業のタイトル（科目名）	授業の種類	授業担当者
障害の理解	講　義	信川　京子

授業の回数	時間数（単位数）	配当学年	必修・選択
15回	30時間（2単位）	専攻科・後期	必　修

〔 授業の目的・ねらい 〕

障害の理解として、障害の概念や障害者福祉の基本理念を学ぶ。また、介護福祉士として、障害のある人の気持ちを理解するとともに、障害のある人の支援を行う基礎的な知識を身につける。

〔授業全体の内容の概要〕

障害のある人の心理や身体機能に関する基礎知識（医学的理解・心理的理解・生活の理解）を学ぶとともに、障害のある人の体験を理解し（障害者理解）、家族を含めた周囲の環境にも配慮した介護上の留意点を習得することを目指します。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

1．障害にあわせた基礎的な知識・介護技術を学び、なぜそれが必要なのかを考えることができること。
2．グループ活動の中で、仲間と協力して課題を達成できること。
3．各章で学んだことを理解し概説することができること。
・障害の概念、変遷、関連法規を理解し概説できること。
・障害のある人の身体的・心理的状況を理解ができること。併せて、障害のある人の日常生活への影響を理解し、どのような視点から介護をすればよいかについて正しく理解ができること。
・WHOによるICIDHからICFへの変遷と意味を概説できること。
・いろいろな障害の原因と疾患と症状を習得し、日常生活への影響とアセスメントの基本的視点が もてるようになる。

〔授業の日程と各回テーマ・内容・授業方法〕

コマ数

1　オリエンテーション、障害者福祉の基礎理解　障害の概念
2　障害者福祉の基礎理解　基本理念　心理的影響と自己概念　バリア
3　肢体不自由のある人の理解　肢体不自由についての基礎知識
4　内部障害のある人の理解　運動機能障害のある人の心理　定義と動向
5　内部障害のある人の理解　心臓・呼吸器・腎臓・排泄器官・小腸機能障害のある人
6　視覚障害のある人の理解
7　聴覚障害のある人の理解
8　言葉に障害を認める人の理解
9　発達障害のある人の理解　基礎知識、心理的影響、知的障害を伴う発達障害のある人
10　発達障害のある人の理解　知的障害を伴わない発達障害のある人、合併する障害の理解
11　精神障害のある人の理解
12　高次脳機能障害を認める人の理解
13　全介助を要する人および難病の人の理解
14　障害者介護における連携と共同、障害をもつ家族への支援
15　試験とまとめ

[使用テキスト・参考文献]

〇テキスト
新介護福祉士養成講座13「障害の理解」中央法規
〇参考書
「障害者白書」内閣府
「国民の福祉の動向」厚生統計協会
〇参考ホームページ：厚生労働省ホームページ

[単位認定の方法及び基準]

〇総合的に判断する
1．出欠・遅刻・早退　10点
2．提出物・小テスト　10点
3．授業態度　10点
4．試験　60点
＊グループで取り組んだことの評価も行ないますので、積極的に関わってください。